

そもそも「象徴化」とは？「象徴化は必ずしも必要か」の議論の前に

田中秀男（関西大学大学院文学研究科）

はじめに

本稿では、ジェンドリンが言う意味での「象徴化」の定義を、彼の一次文献に基づき、考察する。考察の結果、彼の言う「象徴化」とは、通常の日本語の象徴化という語感に比べると、やはり意味合いが広いものだということを確認する。これにより、用語の共通理解がなされた上で、改めてフォーカシングやTAEにおいて「聞き手が話し手に象徴化を促すことは必ずしも必要か」という議論が研究者のあいだでなされる基盤を提示する。考察の手順を述べる。まず第I章で、従来の心理療法の分野において、「象徴化を促すことの是非」に関して交わされた議論を概観する。次に第II章で、ジェンドリンの言う「象徴化」を、「概念化」と「直接のレファレンス」とに筆者の観点から整理する。整理の結果から、最新のTAE研究に対して、筆者が新たな見解を提示する。最後に第III章で、「象徴化」の共通理解とそれに基づく生産的な議論に向けた展望を示す。

I 「象徴化を促すことの是非」に関する従来の議論

「聞き手が話し手に象徴化を促すことは、必ずしも必要なのか」という点に関して、これまで心理療法の分野において十分な合意が得られなかった。

I-1 問題提起

まず、「聞き手が話し手に象徴化を促すことの必要性」への疑念が挙がった。

…はたして人格変化過程において、象徴化は必要なのだろうか。筆者は現段階において、必ずしも必要ないと仮定しておきたい。…[中略]…フェルトセンスに注意を向けることは人格変化にとって必要かもしれないが、象徴化、概念化する必要はない。(田村・村山, 1988, p.249)

I-2 反論

次に、上記の田村・村山(1988)の問題提起に対して、「人格変化の一理論」Gendlin(1964)に基づいた反論が挙がった。

ここで注意しなければならないのは、直接照合、つまり何かを指し示すことが象徴化の第一歩であるという点です。まだ言葉やイメージにはならないけれど、それを「指し示し」そこに何かがあるのは分かる、感じられる、という行為が直接的経験を何か別のもので表現する第一歩であり、すべてこの「指し示す」ことから始まるのです。(近田, 2002, p.61)

ジェンドリンの言う「体験過程の象徴化」を「明確な言語化やイメージ化」と狭く捉えてしまうと、「ことばにしない、ふれない、そっとしとく」といったアプローチが、なぜ体験過程理論からみて臨床的に役に立つのか説明がつかなくなってしまう。(ibid, p.62)

I-3 再反論

更に、近田(2002)のような見解に対して、Gendlin(1964)における象徴化が通常の用法に比べ

て広義であり過ぎるという再反論がなされた。

…ジェンドリンは象徴化を広くとらえている。通常、象徴化とは何らかの言葉なりイメージなりが表出されたことを指すと考えられるが、ジェンドリンは直接のリファランスも象徴化の一部だとしている(Gendlin, 1964)。この主張は、象徴化の結果として生じる現象と、それに至る道筋をつなげるためには便利な主張かもしれないが、このような形で概念を拡張することがはたして望ましいことであろうか。(田村, 2002, p.15)

ジェンドリンの拡張された象徴化概念では、現象を記述する際に困難が生じてしまう。(田村, 2003, p.69)

以上のように、「象徴化を促すことの是非」に関する従来の議論において、合意が十分に得られなかった。その原因は、従来の議論が、一つの一次文献(Gendlin, 1964)に基づいてのみなされてきたことにある。

II ジェンドリンの言う「象徴化」の種類分け：「概念化」と「直接のレファランス」

以下、筆者の見解を提示するに当たって、その方向性を述べる。「明確な言語化という意味での象徴化は必ずしも必要か」という臨床的な議論には立ち入らない。臨床的議論の手前で、そもそもジェンドリンがいう意味での「象徴化」とは何かという、用語の使い方の点で、改めて『体験過程と意味の創造』(Gendlin, 1962)を中心に考察する。

考察の順序は次の通りである。まず、「象徴化」における、「概念化」と「直接のレファランス」の特徴を5つの観点から対比的に論ずる。(1)象徴化におけるその位置づけ、(2)象徴を含んだ発言の例、(3)象徴の存在の有様、(4)象徴が果たす役割、(5)象徴がもたらす効果、の5点である。次に、対比的な考察に基づいて、最新のTAE研究に対して筆者の立場からジェンドリンの言う「象徴化」の再解釈を示す。

II-1 「概念化」とは何か？

(1) 象徴化におけるその位置づけ

「概念化」という用語を、ある種の「象徴化」を名づけるのに使うことにしよう。従って、「象徴化」という用語はより広い種類の出来事を名づけることにしよう。「概念化」はそうした出来事の一つの特殊な種類なのである。(Gendlin, 1962, p.237)

このことから、「概念化」とは、「象徴化」の中の一種類であることが分かる。

(2) 象徴を含んだ発言の例

「私は怒っています」(ibid, p.238)

「私は拒否されることを恐れていたのです」(ibid, p.234)

このように、「概念化」の例として、以上の発言が挙げられる。

(3) 象徴の存在の有様

「概念化」は、(1)言語的象徴で象徴化するような種類の象徴化である…。(ibid, p.237)

このように、「概念化」の場合、象徴はもちろんのこと、存在する。

(4)象徴が果たす役割

「概念化」は…[中略]…(2)象徴化する対象を表示することによって(by representing what is symbolized) 象徴化するような種類の象徴化である。(ibid, p.237)

このように、「概念化」における象徴は、フェルトセンスを表示する。つまり「概念化」の場合の象徴は、フェルトセンスの質を表わす言葉(quality-word)(Gendlin, 1981, p.173)の役割を果たす。すなわち、ハンドルの役割を果たすといえる。

(5)象徴がもたらす効果

…もし発言が「私は怒っています」というのであれば、その感じを思い出すことがあるだろう。(Gendlin, 1962, p.238)

以上のように、ハンドルを用いる「概念化」の場合、象徴はフェルトセンスを表示するので、いったん見失ったフェルトセンスを呼び戻すことが易しいといえる。

II-2 「直接のレファランス」とは何か？

(1)象徴化におけるその位置づけ

概念化を、象徴化の別の種類である「直接のレファランス」と比べてみよう。(Gendlin, 1962, p.237)

このことから、「直接のレファランス」もまた、「象徴化」の中の一種類であることが分かる。

(2)象徴を含んだ発言の例

「この感じは確かに強いのですが、それが何なのかはまだよく分からないんです」(ibid, p.237)

…「今やっているこの作業」、「今日やろうとしていた事柄」(ibid, p.95)

このように、「直接のレファランス」の例として、以上の発言が挙げられる。

(3)象徴の存在の有様

「この感じは確かに強いのですが、それが何なのかはまだよく分からないんです」。括弧の中のこうした発言もまた、もちろんのこと、象徴のつながったものである。(ibid, p.237)
直接のレファランスの場合にも、象徴は欠くことができない。(ibid, p.95)

このように、「直接のレファランス」の場合もまた、象徴は存在する、というのがジェンドリンの見解であることが分かる。

(4)象徴が果たす役割

…しかし、こうした象徴は象徴化する対象を表示したり描いたりはしないのである(do not represent or picture)。(ibid, p.237)

このように、「直接のレファランス」における象徴は、フェルトセンスを表示しない。つまり、「直接のレファランス」の場合の象徴は、フェルトセンスの質を表わす言葉の役割を果たさない。すなわち、ハンドルの役割を果たさないといえる。

(5) 象徴がもたらす効果

「この感じ」などといった象徴がフェルトセンスを意味するのは、感じに直接リファーするものとして象徴を用いている最中だけである。万が一その感じが消えてしまったとしたら、感じを呼び戻す(**bring it back**)だけの力がこうした象徴の場合にはそなわっていないのである。(ibid, p.102)

クライアントが自分の体験過程に直接リファーしているとき、「これ」とか「それ」とか「そのすべてが絡まった感じ」などといった指示代名詞を使うことはよくあるものである。…[中略]…象徴はその感じについての情報を何ら伝えてはおらず(**convey no information about the feeling**)、ただ感じにリファーするのだ。現在の体験過程をそのように指し示すこと(**such pointing to present experiencing**)を、「直接のレファランス」と私は名づけているのである。(Gendlin, 1961, p.235)

以上のように、指示代名詞を用いる「直接のレファランス」の場合、象徴はフェルトセンスを表示しないので、いったん見失ったフェルトセンスを呼び戻すことが難しいといえる。

II-3 改めて、ジェンドリンの言う「象徴化」とは何か？

ジェンドリンの言う「象徴化」においては、やはり、「概念化」はもちろんのこと、「直接のレファランス」もまた、その一種類として位置づけられる。

「概念化」と「直接のレファランス」は共に象徴化の一種である。(Gendlin, 1962, p.238)
…我々は、直接のレファランス（あるいは注意を向けること）を、それ自体既に一種の象徴化と考えるべきである。直接のレファランスは、結果として生じる象徴化と同様に、身体的に感じられる緊張解消を含んでいる。(Gendlin, 1964, p.117)

ここでの「結果として生じる象徴化」とは、近田（2002）の言う「明確な言語化」、すなわち「概念化」に相当する。「概念化」は、ジェンドリンの言う「象徴化」と意味範囲が同一ではなくて、より狭いといえる。

その一方、「直接のレファランス」は、象徴が全くない状態とは異なる。フェルトセンスを表示しないが指し示すだけの象徴を使ってはいる。従って、「直接のレファランス」もまた、ジェンドリンの言う「象徴化」に含まれるといえる。

以上のように、ジェンドリンの言う「象徴化」を確認した結果、再解釈できることを以下に述べる。ジェンドリンは、「直接のレファランス」は「最小限の象徴化」(Gendlin, 1962, pp.208-9)であるという。この「最小限の象徴化」ということは、近年になって TAE の分野において初めて取り上げられた。

「直接照合」は、シンボルを媒介としないシンボル化です。シンボルを媒介としないので、シンボル化する内容を表示(**represent**)しません。「最小のシンボル化」といわれるゆえんです。だから、シンボルによる制約を受けることなく（正確には最小限にして）特定の局面を感じることができます。(得丸, 2010, p.180)

上記引用文への筆者の見解を2点述べる。

まず、「直接のレファランス」は、「象徴による制約を最小限にしている」には賛同する。なぜなら、「直接のレファランス」の場合、象徴の役割は『「意味をもつ」ことなく、ただ指し示すのみ(do not “mean,” only point)』(Gendlin, 1962, p.112)だからである。

しかしながら、「直接のレファランス」が、もし象徴を全く媒介としないとしたら、「やはり象徴化とは言えないのではないか」というような再反論(田村, 2002)を招いてしまう恐れがある。「直接のレファランス」は、「フェルトセンスを表示する象徴を媒介としない象徴化である」と限定しさえすれば、ジェンドリンの言う幅広い「象徴化」の真意がより伝わるといえよう。なぜなら、繰り返すが、「直接のレファランス」の場合にも、象徴は欠くことができず、少なくとも「フェルトセンスを表示しない象徴を媒介とする」からである。

III. おわりに：「象徴化」の共通理解とそれに基づく生産的な議論に向けて

ジェンドリンの言う「象徴化」は、「概念化」のみならず、「直接のレファランス」をも含む。従って、彼の言う「象徴化」は、通常の日本語の象徴化という語感に比べると、やはり意味合いがより広い。この点だけを取れば、田村(2002)の指摘にも一理はあろう。

しかしながら、「直接のレファランス」を含めた「象徴化」という用語の共通理解は、フォーカシングやTAEの文献を論じる際、やはり、日本のジェンドリン研究者のあいだでは欠かせないものである。この点において、筆者は近田(2002)に、概ねのところ賛同する。こうした共通理解がなされることにより、はじめて「症状の重いクライアントや主体感覚が脆弱となったセラピストに対し、フォーカシングやTAEによって象徴化を促すことは必要か否か」という議論が改めて生産的に論じられることになるであろう。

参考文献

- 田村隆一・村山正治(1988)「人格変化の過程において象徴化は必要なのか?：フォーカシングの事例からの考察」『九州大学教育学部紀要 教育心理学部門』33(2), 241-250
- 田村隆一(2002)「フォーカシング・セッションにおける治療関係フェーズとフォーカシング技法の機能：理論的構造化の試み」『福岡大学臨床心理学研究』1, 15-20
- 田村隆一(2003)「フォーカシングにおける技法と現象の関係(2)：技法の機能を中心として」『日本人間性心理学会第22回大会発表論文集』68-69
- 近田輝行(2002)『フォーカシングで身につけるカウンセリングの基本：クライアント中心療法を本当に役立てるために』コスモス・ライブラリー
- 得丸さと子(2010)『ステップ式質的研究法：TAEの理論と応用』海鳴社
- Gendlin, E. T. (1961) "Experiencing : a variable in the process of therapeutic change." *American journal of psychotherapy*, 15(2), 233-245 (村瀬孝雄訳(1966)「体験過程：治療による変化における一変数」村瀬孝雄編『体験過程と心理療法』牧書店, pp.19-38)
- Gendlin, E. T. (1962) *Experiencing and the creation of meaning : a philosophical and psychological approach to the subjective*. New York : Free Press of Glencoe. (筒井健雄訳(1993)『体験過程と意味の創造』ぶっく東京)
- Gendlin, E. T. (1964) "A theory of personality change." In Worchel & Byrne (Eds.)

- Personality change*. New York : John Wiley & Sons, pp.100-148. (村瀬孝雄訳(1966)「人格変化の一理論」村瀬孝雄編『体験過程と心理療法』牧書店. pp.39-157)
- Gendlin, E.T. (1981) *Focusing*. (2nd ed.) Toronto : Bantam Books (都留春夫、村山正治ほか訳 (1982) 『フォーカシング』福村出版)